第九章　エピローグ

闇司祭「あらあら、また精液が止まらなくなっているわね。トロトロ～って滲み出てるわ♪」

女医　「本当ねぇ♪」

マリナ「な、なによ……終わったんでしょ？　ノルマは達成したわよ？」

女医　「終わったのは終わったんだけどぉ……」

闇司祭「そんなえっちなチンポを見せられたら、終わるに終われないわよね。ふふふっ♪」

マリナ「ま、待ちなさい……妹を返してくれるって、さっき言ったじゃない！」

闇司祭「気が変わったの♪　あなたにだって、やめようと思ったけどもう少しいいかなあって思ったことぐらいあるでしょう？　それと同じよ」

【マリナ、フラつきながら逃げようとする】

女医　「捕まえちゃって♪」

ナース「かしこまりました」

マリナ「放しなさい……私はこれ以上付き合う気はないわよ」

マリナ（これじゃ、いままでと変わらないじゃない……）

闇司祭「なら、逃げられる前にこれを入れちゃいましょうか」

マリナ「やめてっ！　それを注入されたら……っ！」

闇司祭「とか言って、そろそろクセになってきてるんじゃない？　相性抜群だし、このまま逃げても思い出すんじゃないかしら。あのお薬があれば、気持ちよくなれるのにって」

マリナ「なるわけないでしょ！　いいから放しなさい！」

女医　「さっさとセットしちゃいなさいよ。焦らす必要ないでしょ」

闇司祭「そうでもないわよ？　注入器を見ただけで怯えてくれてるんだもの♪」

ナース「押さえつけているのは私だとお忘れなきよう」

闇司祭「それは悪かったわ。ナースちゃんも、早くこの子を搾りたいわよね。ということで、セットしちゃうわ♪」

マリナ「やめて……約束通り妹を……んんんんっ！」

闇司祭「は～い、セット完了♪　注入開始～♪」

マリナ「んあぁぁあぁあっ……！　おちんちん、限界超えてるのにぃ……っ！」

女医　「超えてたって大丈夫だってわかってるでしょ？」

マリナ「精力が回復するのは……あんぐぁっ、わかってる……けどぉ……おちんちんはぁ、刺激され過ぎて感覚がおかしくなってるのぉ……」

女医　「確かに、しごかれ過ぎたらそうなるわね」

闇司祭「でもそれは、搾精しやすい身体になってくれてるって意味よね？　だったら、益々ここで逃がすわけにはいかないわ♪　注入量を増やしちゃいましょう♪」

マリナ「はぁぁぁあんっ……！　あっ、ぁ、ああっ……んあぁぁあぁあっ！」

ナース「んっ……！　この痙攣は……マリナ様は絶頂しているようです」

女医　「あぁ～らぁ～、注入しただけでイっちゃうようになってたのねぇ♪　とってもエッチで、責め甲斐があるわ……ちゅっ、んちゅっ……」

闇司祭「あらいやだ、もうキスを始めちゃったの？」

マリナ「んぷっ、んんっ……！」

マリナ（イってるところにキスなんて……したくないのに……キスなんて、嫌なのに……）

マリナ「ちゅっ、ちゅ、あむっ、ちゅっ……れるっ、じゅるぅっ……」

闇司祭「ふふふっ♪　たいして嫌がってないわね。射精し過ぎて快楽に流されてるみたい」

ナース「ずるいです。先生、私にもキスを」

女医　「はむっ、んちゅっ……あなたも私としたいの？　じゃあ、ベッドに移しましょ。そうすれば、たっぷりキスできるわ」

【マリナをベッドへと移動させる】

ナース「あぁむっ、ちゅっ、むちゅぅ、はむぅっ……」

女医　「早いわよ……ちゅっ、ちゅぅぅぅ、れるっ、じゅるっ……」

マリナ「むちゅっ、ちゅっ、ちゅ、はぁあむっ……ふたり同時なんて……あむっ、んちゅっ、ちゅっ、ちゅぅぅぅ、んれるっ」

マリナ（もう頭がぼーっとしてる……キスしたくて、おちんちんはお薬注がれてドクドクしてて……）

闇司祭「私を差し置いて盛り上がっちゃうなんて嫌ね。まだ注入器を抜いてもいないのに……っ！」

マリナ「んあぁあっ……！　乱暴に、抜いちゃ……はむっ、んちゅっ、んじゅるぅ……」

闇司祭「だって、キスに夢中なんだもの♪　少しぐらい乱暴にしないと、チンポに気を向けてもらえないじゃない」

女医　「んれるっ、れるるっ……それは、あなたの責め方しだいでしょ……んちゅっ、じゅるっ……」

ナース「先生、こっちにも……マリナ様とばかりキスしないでください……ちゅっ、んちゅっ、ちゅぅぅぅぅっ」

女医　「こら……はぷっ、んぷっ……この子が置き去りになっちゃうでしょぉ……それじゃ意味ないのよ……ほら、この子も一緒に……あむっ、ちゅっ……」

闇司祭「ふふふふっ♪　こっちも思い切りやれってことね。いいわ、手加減なしでいきましょう♪　確か、ナースちゃんがやってたガーゼでこするやつがかなり効いてたのよね……」

マリナ「んんっ……！　んっ……！　あれはダメっ……！」

女医　「喋らないの……あむっ、あぁむっ、れるるるっ……」

マリナ「はぷっ、んちゅっ……あれが一番ダメ……おちんちんがなくなっちゃう……れるっ、じゅるっ、んちゅるっ……」

闇司祭「そうは言っても、もう準備できちゃったわ♪　改めて、病院っていいわね♪　快楽責めをするための道具がなんでも揃うんだから……っ！」

マリナ「ひぐっ……！」

闇司祭「ほらほら、キスばかりに執心しないでチンポも気にしなさい！　ごしごしごしごしっ！」

マリナ「んおっ！　おおおっ！　おぉぉんっ！　おぉぉぉぉおっ！　らめぇぇぇ……っ！出ちゃう……出ちゃう……っ！」

ナース「先生、これではキスを続けられません」

女医　「ここを無理やり塞ぐのがいいんじゃない♪　んぅ～ちゅっ♪」

マリナ「んっ……！　んんんんっ！　んぷっ！　んぶぶぶっ！　んぶっ……！」

マリナ（口、塞がないで……せめて、声を出せないと……っ！」

ナース「んちゅっ、ちゅっ……声を聞かれたくないなら……はぁむっ、ぢゅるるっ、キスをするのが一番ですよ……れるっ」

マリナ「んぶっ！　んぷっ！　んんんっ！　んぷぷぷぷぷっ！」

マリナ（ダメっ……！　出ちゃう、出ちゃうっ……！　もう出ちゃうっっっっっ……！）

マリナ「んおぉぉおおおっ……！　ぉぉおおおおおんっ……！」

闇司祭「んっ……あらあら、潮吹いちゃったわね♪　トロトロ滲んでる精液と混じって……ふふふふっ♪」

マリナ「ぉおおおぉ……んおおぉおっ……ほぉ、ほぉ……おぉおぉおおっ……」

女医　「あーあー、ビックンビックン跳ねてるわ。こんなに早く出ちゃうなんて、随分と

はしたないおちんぽになったわね♪」

ナース「しかし、射精ではありません。副作用で漏れている精液と混じってはいますが」

闇司祭「毒液を再注入してガーゼ責めを続けるわ。射精させないと、ガーゼ責めを終われないもの。そっちはキスをしててていいわよ」

マリナ「んあっ……！　また注入器が……！」

闇司祭「注入開始～♪」

マリナ「んぐぅぅぅぅぅぅっ……！」

女医　「ふふっ♪　ドクドク入ってく♪　こっちは……あぁぁむっ、ちゅっ、んちゅっ……れるれるれるっ……んじゅぅぅ」

マリナ「はぷっ、んぶっ……！　んぶぶぶぶっ！　んぷっ……！」

ナース「れるちゅっ、んちゅっ……あぁむっ、んちゅっ、ちゅっ……先生、こちらも薔薇の毒を使いましょうか」

女医　「それもいいわね♪　どうせわたしたちは暴走状態だし」

マリナ「おちんちんだけで十分でしょぉ……んんぅ、ふぅぅう、んんんぅ……こんなに効いてるのよ……」

女医　「さらに効果が出るかもしれないわよ？　だったら、使うしかないでしょ♪」

ナース「準備できました。マリナ様のお口に垂らします」

女医　「お願い。わたしはキスしてるから、適当にやっちゃって♪　んちゅっ、ちゅちゅちゅっ、ぴちゃぴちゃっ、ちゅ、んちゅっ……」

マリナ（口にまで入ってきた……ただでさえ、頭おかしくなって、身体が勝手に動いちゃう状態……これで口からも流し込まれたら……）

マリナ「ちゅっ……あむっ……はぁ、あぁぁ……んちゅっ、れるっ……」

闇司祭「あらぁ？　泣き出してないかしら？」

ナース「目をとろんとさせながら泣いています」

闇司祭「やっぱり、まだ続けてよかったわ♪　こっちも、そろそろガーゼ責めを再開してあげないと……っ！」

マリナ「ひあぁっ……！」

闇司祭「注入器を抜いても、尿道がぱっくり開いたままね♪　えっちなお口から精液が滲んで……ふふふっ、ドスケベチンポの出来上がりだわ♪」

女医　「さっさと射精させて……ちゅっ、んちゅっ……わたしと変わりなさいよ……じゅるるっ、れるっ……こんなにはしたないおちんぽ、独り占めさせないわよ……んちゅっ」

闇司祭「立場を忘れたのかしら？　私はあなたのパトロンよ？」

女医　「関係ないわよ……んふっ、ふぅ、ちゅっ、あむっ……ほら、もっと激しくしてびゅるびゅるさせなさい……ちゅっ、あむぅっ」

闇司祭「仕方ないわね。でも、私の邪魔はさせないわよ」

女医　「もちろんよ。途中で奪ったりしないわ」

ナース「先生……ちゅっ、ちゅちゅっ、ぴちゃぴちゃ、れるちゅ……私もマリナ様をいじめていいのでしょうか」

女医　「わたしのあとなら構わないわよ……ちゅ、ちゅうぅっ、はぁむっ」

マリナ（勝手に順番まで決まってく……しかも、医者とナースまで責めてくるってことは、最低でも三回射精しないと終わらない……）

闇司祭「いまのは聞こえてたわよね、被検体ちゃん。そっちのふたりまで満足させてちょうだいね……ごしごしごしごしっ！」

マリナ「はぁ、んんぅ、あぐっ、ふぐっ……！　あぁ、んあああぁっ……！」

闇試合「その調子で、たくさん鳴きなさい……っ！」

マリナ「ひぐっ、ふあっ、あぁあああぁっ、んんんんんっっっっ！」

女医　「キスも忘れないこと……ちゅっ、あむっ、はぁむ、あむっ」

マリナ「んぷっ、んんっ……ちゅっ、ああむっ、んちゅっ、はぷっ……！」

闇司祭「ふふふっ、チンポがキスに反応してるわ♪　もっと激しくしてあげて♪」

女医　「言われるまでもないわよ……れる、じゅるるっ……せっかく毒液までつかってるんだから……んちゅっ、ちゅっ」

マリナ「はぁ、んぅ……んちゅっ、あむっ、んれるっ……もっと、優しく……れるっ、んちゅっ、はぁむっ……」

ナース「口ではそう言っていますが……ちゅっ、ちゅむっ、あむっ、はぁむっ、あぁむっ

……舌使いが変わってきていますよ……ちゅっ、ちゅちゅっ」

闇司祭「チンポまで激しくしたら、すぐに出ちゃうかしら？」

女医　「潮を吹いたあとなんだから、じっくり時間をかけるよりさっさと出させたほうがおもしろそうじゃない？　どれだけ痙攣するか、どれだけ精液が飛ぶのか、あなたも気になるでしょ」

闇司祭「いい実験になりそうね。じゃあ、亀頭が火傷しないように毒液を増やして……」

マリナ「んんっ……！　んんんっ～っ！　激しく、しないで……いまの状態でも、すぐに出そうだから……んっ！　はぶっ、んんんぷっ！」

闇司祭「その割には、出ちゃうとか言わなかったじゃない。刺激が、我慢できる範疇だったってことでしょう？」

マリナ「キスが激しくて、言えなかっただけ……んぷっ、んんんっ！」

闇司祭「さっきは、キスを振り払うほど叫んでたわよ？　激しくしないでっておねだりは聞けないわ」

マリナ「そんな……んぶっ、んちゅっ、はぷっ、んちゅうぅぅ……」

闇司祭「激しくするから、さっきみたいな声を聞かせなさい♪　ごしごしごしごしっ！」

マリナ「ふぐぁっ！　んぐぁっ！　あぁあぁっっっっ！　んあぁぁぁあっ！　ダメダメダメダメダメダメダメダメっ！　出る出る出る出るっっっっ……！」

女医　「すごい乱れようね」

ナース「押さえ付けましょうか」

女医　「しなくていいわ。悶えてる姿も見たいもの」

マリナ「んあぁあっ！　ああぁあぁっ！　出るっ！　らめぇっ！　んあああぁっ！　おちんちん、だめぇぇぇっっっっ！」

闇司祭「盛大に射精しなさい♪　いっぱい飛ばしてくれれば、私からの愛撫は終わるわよ♪」

マリナ「自分でコントロールなんて……んおおっ、おぉぉっ、おぉおおんっ、おぉおぉっ、おっ、お、ぉ、おっ……！」

闇司祭「ごしごしごしごしっ！」

マリナ「イクっ、イクっっ、イクイクっ、イクぅうっ！」

女医　「ちょっとは我慢させてもいいんじゃない？」

闇司祭「それくらい考えてるわよ」

マリナ「んあっ、あぁ……あぁぁ……い、イカせて……出そうなの……焦らさないで……」

闇司祭「ごーし、ごーし、ごーし……ちゃんと刺激してあげてるでしょう？」

マリナ「ひぐっ……あぐぅっ……それじゃあ、イケない……あぁぁぁ……」

闇司祭「ふふふふっ、チンポがイキたくて震えてるわ♪　しばらく見ていたいわね」

マリナ「あぁぁあぁ……うぅぅ、んんぅぅぅ……あぁ、ぁ、ぁ、あぁあぁあ……射精させてぇ……イキそうなところで、止めないでぇ……はぁはぁはぁ」

ナース「漏れ出てくる精液が増えていますね」

女医　「限界は超えちゃってるってことでしょ」

マリナ（イキたい……射精したい……あと一回でも強くこすってくれればイケるのに……）

闇司祭「ごーし、ごーし、ごーし、ごーし……しっかりと、亀頭全体に快感を与えてあげるわね。ごーし、ごーし、ごーし」

マリナ「あふぅぅ……んんんぅ……うぅぅぅ……あぁぁぁ……射精、見たいんじゃなかったの……」

闇司祭「射精も見たいし、こうして涙目で哀願する姿も見たいのよ」

マリナ「きちくぅ……鬼……悪魔……」

闇司祭「なんとでも言いなさい。まったく気にならないわ。あなたには、数え切れないくらい罵詈雑言を浴びてるもの」

マリナ「ふぅ、ふぅ、ふぅぅぅ……」

ナース「あまりやり過ぎると、また意識が飛んでしまうと思われます」

闇司祭「心配しなくていいわよ。加減はしてるわ」

女医　「背をのけ反らせた状態で呻き続けてる。本当にギリギリのところでコントロールしてるわねぇ」

マリナ「はぁ、はぁ、はぁ……もうダメ……身体がもたない……」

マリナ（どうなったっていいわ……司祭の手のひらの上から逃げ出せるなら、壊れたって構わない……）

闇司祭「力が抜け始めたわね。さすがにギブアップかしら？」

女医　「普通は、すでにギブアップしてるわよ。毒液がなければ、何度失神してるかわからないわ」

ナース「私なら、いま少し焦らすと思います。マリナ様であれば、耐えられるはずです」

マリナ「ひとでなし……あなたの意見なんて……」

闇司祭「ごしごしごしごしごしっ！」

マリナ「ひぐうっ！　あぁっ！　んあぁあっ！　あぁあぁあぁっ！　いきなり……んあぁあっ、ああぁあぁあっ！」

女医　「一番容赦ないところで激しくしたわね」

闇司祭「そうでないと、楽しくないでしょう♪　ほら、被検体ちゃん。念願の射精タイムよ♪　ごしごしごしごしっ！」

マリナ「イクっ！　イクイクイクっ！　おちんちん……おちんちんイクぅぅぅぅぅぅっ！　イクっ、イクっ……！」

闇司祭「どっぷり出して♪」

マリナ「イクぅぅぅぅぅぅぅっ！」

闇司祭「んんっ～♪　出た出た♪」

女医　「すっごい……勢いがよすぎて、ガーゼを貫通してる」

マリナ「んぐっ、あぐっ、んぐあぁあっ、あぁあああぁあっ！」

マリナ（出せた……けど、これじゃ意識が……）

闇司祭「焦らされて溜まったのを、全部出すのよ♪　ごしごしごしごしっ！」

マリナ「もうこすらなくて、いい……刺激がなくても、出る、からぁ……」

闇司祭「止めてほしけてば、おねだりなさい♪」

マリナ「止めて、くだひゃい……射精、してますから……」

闇司祭「よく言えました♪」

マリナ「はぁはぁはぁはぁはぁはぁ……」

マリナ（ガーゼの愛撫は止まった……これで、一発目は終わり……あと二回……二回出せば……）

女医　「注入器をお願い。毒液を追加するわ」

マリナ「うぅぅう……きちくぅ……一分も休ませてくれない……」

ナース「先生、準備できました」

女医　「たんまり注入してあげて♪」

ナース「かしこまりました。では……」

マリナ「んんぐっ！」

ナース「セット完了。注入します」

マリナ「あぁぁぁ……」

闇司祭「注入による快感は小さくなってるわね」

女医　「身体は慣れてしまうものよ。あと、悶えるほどの体力が残ってないんでしょ」

ナース「司祭様の注入量を超えます。続けますか」

女医　「続けて」

ナース「承知しました」

マリナ「はぐっ、んぐぅ……いくら注がれても、溢れるだけ……」

女医　「膀胱にも溜まって、あなたの精力回復につながってくれるはずよ」

マリナ「医者が言っていいことなの……」

女医　「もちろん、医者としての判断よ」

闇司祭「お医者さんを信じられなくなるなんて、とんだ不幸ね♪」

マリナ「言いたいこと言って……」

ナース「限界量まで注入してしまっているようです。引き抜きます」

マリナ「あぁぁぅ……」

女医　「さぁて、わたしの番ね♪　楽しい楽しい、診察の時間よ♪」

【女医、マリナの股間へ移動】

女医　「このガーゼ、わたしも借りるわね」

マリナ「なっ……！　あ、あなたまでそれを使うの……？」

女医　「あら、ダメだった？　ふたりが使ってるのを見て、楽しそうだなぁ～って思ってたのよ」

マリナ「違うのにはしてくれないの……？」

女医　「ふ～ん。じゃあ、手コキとかパイズリとかだったら、進んで受けてくれるって言うの？」

マリナ「そうじゃ、ない……けど、それは……っ！」

闇司祭「ガーゼを見ただけで涙目になっちゃってるわ♪」

ナース「マリナ様を快楽責めする上で、最も効果的な方法なんだと思います」

女医　「だったら、徹底的にやらないといけないわね♪」

マリナ「軽くでもかまわないって思うところでしょ……！」

女医　「最も効果的な方法って言われてるのよ？　ひぃひぃ言わせられなかったら、わたしがテクニックのない女って思われるじゃない。だから、徹底的にやらないといけないの♪」

マリナ「くぅ……」

女医　「はーい、準備完了〜♪　毒液でひたひらのガーゼを亀頭に被せて……ごしごしごしごしごしっ！」

マリナ「ふぐあぁぁあっ！　あぁあっ！　んあぁあっ！」

闇司祭「さっきより効いてるわね」

ナース「押え込む必要がありそうです。司祭様もあちらを。このままでは、先生の愛撫に支障が出ます」

闇司祭「仕方ないわね。ただのお手伝いだなんて」

女医　「嫌なら、キスでもしていればいいんじゃない？」

闇司祭「あなたあたちのよだれでベトベトだもの、私は嫌よ」

女医　「だったら、お手伝いに甘んじてなさいよ。潮を吹かせて射精もさせたんだから、欲張らないの」

マリナ「あぁぅ、んあぁあっ、あっぐぅぅ、んお、ぉおおっ、ぉおおおんっ……！」

女医　「うふふっ♪　悶えてる悶えてる♪　もっとゴシゴシするわよ～……ごしごしごしごしっ！」

マリナ「ひぃ、あぁあっ、んぐっ、ふおぉおっ！」

女医　「ちょっと浮かせて、尿道口の辺りだけを……ごしごしごしごしっ！」

マリナ「いあぁあっ！　熱い……オシッコ出るところがぁ……ひぐぁああっ！」

女医　「オシッコが出るところなんて……あなたはいまから精液をたんまり出さないといけないのにぃ……ごしごしごしごしっ！」

マリナ「んんんんっ……っっっっ！　あぁあぁっ……っっっっ！　はぁ、はぁ、はぁ……んああぁぁあっ……！」

ナース「マリナ様の涙が止まらなくなっています」

女医　「口も開きっぱなしね。もう閉じる機能を失っちゃったみたい」

マリナ「んぎぃっ、ひぎぃいっ……はぁ、あぁぁんっ……助けてぇ……殺さないでぇ……はぁ、あぁ、んんんぅ、あぁあぁぁあっ……！」

女医　「死なないし、殺す気はないから大丈夫よ。ただ、射精させたいだけだから♪　ごしごしごしごしっ！」

マリナ「んおぉおおおっ……！　ほぉほぉほぉ……んおぉおおおっ……！」

女医　「やり続けてると、どんどん楽しくなってくるのね♪　クセになりそうだわ♪」

マリナ「他人をいじめて、おい、て……ぉお、おおおっ……クセになりそうだとか……ほぉ、ほぉ……っ」

女医　「ひとでなしとか言うんでしょう？　いっぱしのお医者さんを相手に」

マリナ「あなたはもう……ほぉ、ほぉ……医者じゃ、ない……っ、私を捕らえて、性的に

いじめた……はぁはぁ……犯罪者、よ……」

ナース「先生、容赦は不要です」

女医　「うふふっ♪　わたしへの侮辱には敏感ね♪」

ナース「当然です」

闇司祭「呑気なことを言ってる場合じゃないかもしれないわ。さっきはこすり始めた途端に、出るって言い出したのに、言わなくなってるのよ？」

女医　「トロトロ漏れ出てる量が増えてるのが原因かしら」

ナース「どの道に、こすり続けるしかありません。薔薇の毒は入りきらなくなるまで注入しましたから」

マリナ「常に出そうな状態だから、言ってない、だけよ……んお、おぉおおっ……！」

女医　「だったら、いまはどれくらい出そうなの？」

マリナ「いつでも、出る……もう、出そうとか、そういう感覚すら薄いのよ……」

闇司祭「すごいわ♪　私たちはあったり暴走状態になっちゃったのに、次から次へと副作

用ばかり出てきてる」

女医　「最初は沈黙してたはずよね？」

ナース「耐性がついて、効果が変わったのでは？」

女医　「その線が妥当だわ」

闇司祭「最後の最後まで楽しませてくれるわね♪　こんなに上等な被検体は、もう出会えないでしょう」

女医　「だから、きちんとしごいて射精させないとね……っ！」

マリナ「んおおっ……！　おおぉっ！　ぉおおんっ！　おおぉおおっ……！　こすり、しゅぎぃ……ひぃひぃひぃっ……！」

ナース「精液の量がさらに増えました」

女医　「ここまですれば……っ、びゅるびゅる出してくれるでしょ……っ！」

マリナ「あぁあっ……出るっ、出るっ……！　出ちゃう……っ！　もうこの感覚は来ないと思ったのに……っ！」

女医　「ごしごしごしごしっ！」

マリナ「ひぃ、ぉおっ、んおっ、ぉおおおっ……！」

女医　「ごしごしごしごしごしごしごしごしっ！」

マリナ「イクっ、イぅぅっ！　イクイクイクイクっ！　おちんちん、イっくぅぅぅぅぅぅぅっ！」

女医　「うわっ……さっきより飛んでる♪　段々、潮吹きと遜色なくなってきたわね♪」

マリナ「はぐっ、んぐぅぅ、んんぅ、あぁぁああっ……」

マリナ（なにが出てるのかすらわからない……かろうじて、おちんちんが熱いのは感じるけど……）

闇司祭「漏れ出てくる精液も、オシッコと大差なくなってきてるわ♪」

ナース「あとひと息で、射精は潮吹きに、トロトロの精液はオシッコに、状態が変わる可能性があるんですね」

女医　「やる気満々じゃない♪　どうしたの？　そんなに、この被検体ちゃんを責めたくなった？」

マリナ「あなたが、ある意味、一番、危険……」

ナース「私も暴走状態なのをお忘れですか？　さっきから、責めたくてウズウズしているんです♪」

女医　「珍しく口角が上がったわ♪　これは見物ね。わたしも、積極的に手伝ってあげるわ♪」

ナース「ではまず、マリナ様の巨根ちんぽに注入器をセット。注入を開始します」

マリナ「巨根って言わなくていい……」

女医　「ガーゼは使う？」

ナース「いえ、手コキにしようと思います。マリナ様には、手コキも有用な手段ですので」

闇司祭「あなたの手コキ、強烈で好きなのよね♪」

ナース「あとで司祭様も味わいますか？」

闇司祭「見る分にはって意味よ」

ナース「あ、すでに薔薇の毒が溢れていますね」

女医　「勃起は維持できてるし、抜いちゃっていいんじゃない？　もう射精だけじゃ萎えなくなってるわ」

ナース「では、引き抜きます」

マリナ「んんんぅ……っ」

ナース「いまを思えば、最初にマリナ様を責めたのも手コキだったかと思います」

マリナ「べつに、思い出にはなってないわよ」

ナース「そうおっしゃらず。あのときよりも、格段に気持ちいい手コキで昇天させて差し上げますので」

女医　「わたしは、新品のガーゼを用意しておくわ。使いたくなったら使いなさい」

ナース「ありがとうございます、先生」

マリナ（手にも、当然のようにお薬を塗るのね……）

ナース「絶望しているところすみません。おちんぽを触ります」

マリナ「好きにしなさい……どうせ、逃げられないんだから……」

闇司祭「降参するのは早いわ。抵抗する意思ぐらい見せてほしいものね」

マリナ「言ったところで、意味ない……あっ」

ナース「まずは、ソフトに参ります。少しは手心も覚えたいので」

マリナ「あっ……んっ……あふっ……ふあっ……っ」

マリナ（本当に優しい……片手で、ゆっくりシコシコしてくる……）

ナース「マリナ様のお好きなカリ首と裏筋を丁寧にこすりながら、シコシコしていますよ。わかりますか？」

マリナ「少し、だけ……あ、ん、ぁっ、ふぅっ……」

闇司祭「予想と違ってがっかりって思ったけど、被検体ちゃんがかわいくなってるからよしとしましょうか」

ナース「マリナ様は、とってもかわいらしい方ですよ。私は、フラットなところから責め

たことがあるのでわかります」

マリナ（気持ちいい……マッサージされてるみたいで、でも快感があって……）

マリナ「ずっと、そのまましごいて……この手コキだったら、ずっと味わっていたい……」

ナース「それはマリナ様の反応しだいで変わりますが、いましばらくはこのままでいいでしょう……シコシコ、シコシコ」

闇司祭「力いっぱいに責めてるわけじゃないのに、精液の量が増えていくわ♪」

ナース「感覚が鈍っているので、性的に責められているというより、普通に心地よくなっているのではないでしょうか」

闇司祭「なるほど。そこまで毒液が効いているのね」

女医　「あら？　なんだか、思ってた光景と違うわね」

ナース「まずは、優しく刺激を与えてあげることにしました」

女医　「それでこんな気持ちよさそうな顔をしてるのね」

マリナ「はぁぁ、んんぅ……あなたたちと違って、とってもいいわよぉ……あぁぁ、あぁぁぁん……」

女医　「恍惚とは、まさにこのことね」

ナース「しかし、先生がガーゼをお持ちになりましたので、いじり方を変えようと思います」

マリナ「は、激しく、しないで……っ」

ナース「大丈夫ですよ。縦にしごいていたのを横にするだけですから。両手でおちんぽを握って……雑巾を絞るように刺激します」

マリナ「あっっ、んんんっ……！　ちょっと強い……でも、悪くない……はぁ、あぁぁ……」

闇司祭「砂漠でオアシスを見つけたって感じかしら」

女医　「すっかり油断してるわ」

【女医、ガーゼを毒液に浸す】

ナース「いかがですか、マリナ様。してほしいことがあれば、仰ってくださいね」

マリナ「そのままでいいわ……これなら、気持ちよく射精できそう……」

ナース「そうでございますか。では、強さは変えずに少し早くしますね。マリナ様の気持ちいい射精を私も見たいですから」

マリナ「あんっっ……！　あっ……！　少し、出そうになってきた……♪」

闇司祭「普通に気持ちよくなっちゃって♪」

マリナ（すごくいい……このお薬、これだけ乱用しても媚薬効果は薄れないのね……使い方さえ間違えなければ、ちゃんとしたお薬なんだわ……）

マリナ「あぁぁ……もうちょっとで出る……そのままお願い……びゅるびゅるって行かないかもしれないけど、ちゃんとどぷって出るから……」

ナース「わかりました。このまま続けますので、好きなように気持ちよくなってください」

マリナ「はぁぁ、んんんぅ……あっ……出る……んっ、出るっ……もっと味わっていたいけど……ふぅふぅ」

ナース「本当に出てしまいますか？」

マリナ「うん、出る……お射精、しちゃう……♪」

ナース「では先生、そろそろ出番です」

マリナ「ま、待って……医者が参加するなんて聞いてない……」

女医　「手コキ自体は、いままでと変わらないわよ？　ただここに、ガーゼ責めが追加されるだけで♪」

マリナ「嫌……いやぁっ！　やめて、それはもう……っ！」

女医　「巨根だから、先っぽが飛び出ててやりやすいわ」

ナース「私はこのままのペースを保ちますから、あとは先生のお好きなように」

女医　「任せなさい。一気に射精させるわ♪」

マリナ「そんな、そんな……っ！　もう地獄は……っ！」

女医　「ごしごしごしごしっ！」

マリナ「ひぐぅっっっっ！　んあっ！　あぁぁあぉおっっ！　出るぅぅっ！　で

るぅぅぅっ！　おちんちん、んあぁあぁあっ！」

女医「ごしごしごしごしごしごしごしごしっ！　一気に狂い始めたわね♪」

マリナ（手コキは優しいままなのに、先っぽだけ強制的にイカせられる……っ！）

マリナ「イクぅぅぅっ……！　イクぅぅぅぅっ……！　また、ぷしゃーって出ちゃうぅぅぅぅっ……！」

女医　「それを期待してるのよ……ごしごしごしごしっ！」

マリナ「んおぉお……！　おぉおぅ……！　イクイクイクイクイクイクイクっ……！　イっくぅぅぅぅぅぅぅぅっ……！」

ナース「んんんっ……！　マリナ様の射精を確認。やはり、先ほどよりも潮吹きに近くなっています」

マリナ「ほぉ、ほぉ、ほぉ、ほぉ、ほぉぉ……鬼ぃ……悪魔ぁ……最後に裏切るなんてぇ……はぁ、はぁ、はぁ……」

闇司祭「必要以上に優しくしてたのは、先生様のガーゼ責めを見越してのことだったのね。残酷だわ」

ナース「予定では、徐々に手コキを激しくするつもりでした。しかし、先生がガーゼをご用意なったので、途中で予定を変えたんです」

女医　「おかげで、いい射精が見られたわ。わたしも、おいしいところを持っていけて大満足よ」

ナース「すみません、マリナ様。しかしですね、これで、ラスト三回の射精を終えました。晴れて、マリナ様は自由の身です」

女医　「よかったわね、死なずに終わって。わたしが言った通りだったでしょ？」

マリナ「ほとんど死にかけたわ……」

マリナ（何度も死ぬような思いをしたけど、ガーゼ責めが続いたのが一番つらかった。これが最も効果的な責め方って言われても納得しちゃう」

闇司祭「じゃあ、追加でもう一回死にかけてもらおうかしら？」

マリナ「えっ……いまなんて？」

闇司祭「もう一回死にかけるのはどうかしらって聞いたのよ」

【闇司祭、ナースを退けてマリナの股間へ移動】

マリナ「何回騙せば気が済むの……」

闇司祭「騙したんじゃないわ。ナースちゃんの手コキが激しければ、それで終了だったもの。ただ、あれで終わりなのは味気ないでしょう。せっかく、射精が潮吹きに近づいてきてるんだし♪　それに、何度も騙されちゃうあなたも悪いんじゃなかしら？」

マリナ「それは……っ！」

闇司祭「時間が空いちゃうのがもったいないから、もう始めるわよ。ガーゼ責めじゃなくて手コキだから、そこは安心なさいね」

マリナ「ひっ……っ！」

闇司祭「毒液の注入もなしよ。すでに追加注入はできない状態だし」

マリナ「お薬がなくても、ガーゼ責めじゃなくても、快楽責めには変わりないでしょう……！」

闇司祭「こういう言い合いの時間がもったいないの。両手で拝むように包んで、一気にしごいていくわよ♪　シコシコシコシコっ！」

マリナ「んあっ、んんっ……！　あぁ、んんんっ……！　出る、出るっ……もう出る、も

う出る……っ！」

闇司祭「少しは我慢なさい♪　すぐに出しちゃったら、射精回数を追加するわよ」

マリナ「むりぃ……もう終わったと思ったんだから……我慢なんて、できない……っ！」

女医　「結局、一番鬼畜なのはあなただったわね」

ナース「私は、お風呂の用意をしてきますね。終わったあと、マリナ様をお連れしないとなりません」

女医　「この状態じゃあ、妹に合わせられないものね。せっかく再開させても、面倒なことになるだけだわ」

闇司祭「というわけだから、どれだけ汚れても大丈夫よ。シコシコシコシコっ！」

マリナ「あぁぁぁ、んんんぅ、そんなの関係なく出ちゃう……っ！　あぁっ、出るっ、イクっ、おちんちんイっちゃう……っ！」

闇司祭「我慢できないのね。じゃあ、いっぱい出してくれたら一発で終わりにしてあげるわ」

マリナ「量なんて、コントロールできない……あぁぁあぁぁ、イクぅ、イクイクイクっ！

イクっ！」

闇司祭「出すなら大量に♪　理解できたならイっていいわよ」

マリナ「理解した、理解したからぁ……」

闇司祭「ならば、好きなようにイキなさい……シコシコシコシコっ！」

マリナ「イクぅ、イクぅぅ、イクぅぅぅ、イクぅぅぅぅぅぅぅぅっっっっ……！」

闇司祭「んふふっ♪　言いつけは守れるタイプなのね♪」

マリナ「守れるとかじゃ、ないけど……」

女医　「完全にもう、潮吹きと同じになったわね。この噴射量といい勢いといい、精液が出てる潮吹きって呼ぶのが正解よ」

闇司祭「そうなると、この状態での潮吹きにも興味が沸くわね。ちょっとやってみようかしら。亀頭だけを……グリグリグリグリっ！」

マリナ「あぁああぁぁぁえぇぇあぁぁあぁあっ……！　んあぁぁあああえぇぇあぉおおおおっ……！　おおおっ、おおおおぉ、おぉおおおおおっ……！」

女医　「壊れちゃった。少し離れてたほうがいいかも。いままでの比じゃない量が飛んできそうだわ」

マリナ「出ちゃう出ちゃう出ちゃう出ちゃう出ちゃう出ちゃう出ちゃう出ちゃう出ちゃう出ちゃう出ちゃうっ……！　出ちゃうぅぅぅぅぅぅぅぅっ……！」

闇司祭「んんっ……！　すごい……溜まった状態のオシッコと同じ勢いじゃない。私の顔まで汚して♪」

女医　「結構離れたのに、白衣はビショビショにされたわ。近くにいたら、あなたみたいに顔まで汚されてたわね」

マリナ「出てるぅぅ……よくわからないのぉ、出ちゃってるぅぅぅぅ……」

闇司祭「潮吹きよ。いま言ってたでしょう？　私の顔も、先生の白衣も、この診療室も、いまの潮吹きでビチャビチャになっちゃったわ♪」

マリナ「しおぉ、ふきぃぃぃ……ひぃひぃひぃひぃ……潮吹きぃ、したぁ……」

マリナ（潮が出てたのぉ……？　また射精したのかと思ってたぁ……感覚が、射精にそっくりだったからぁ……）

女医　「全身がガクガクしちゃってる。これ以上は、責めたくても無理ね。なにをしても

震えるだけでしょうし、楽しみもないわ」

闇司祭「どの道終わりよ。いまので満足したもの。この顔にかかった潮……んふふっ♪嗅いでみると、案外いいにおいがするのよ」

女医　「その趣味趣向は頷けないわね。精飲はいいけど、顔を汚されるのはご免だわ。メイクだって崩れちゃうし」

マリナ「終わり、なの……？　でもまだ、続く……あなたちのことだから……何回だって……たぶん私が死ぬまで裏切り続ける……」

闇司祭「そんなことはないわよ。本当の本当に終わりなの。何回も騙したから信じられないかもしれないけど、今回ばかりは騙さないわ」

マリナ「終わりぃ……終わらないから終わりぃぃ……終わらないことを終わりって言う人たちだから、終わりって言われたら終わらないのぉ……」

女医　「かわいそうに、廃人みたいになっちゃってるわ。最後のがトドメだったわね」

闇司祭「そうは言っても、早いところお風呂に行って綺麗にしないと、妹を驚かせてしまうわよ♪　それでいいのかしら？」

マリナ「妹……あぁ、妹……うん、お姉ちゃんが助けにきたのぉ……妹を、助けにきて…

…妹ぉ、妹ぉ……」

女医　「お風呂に関しては、お湯を張り終えたら迎えが来るでしょう。正気に戻らなくても、連れて行っちゃえばいいだけよ。きっと、お風呂に入れている間に正気を取り戻してくれるわ。何回射精させても、そのたびに復活してきたんだし」

闇司祭「本当に戻るのかしら。チンポは勃起したまま治まらなくなってるみたいだし、この狂い方はさすがに始めてよ？」

女医　「戻らなかった場合は、カルテにそう記すだけよ。重篤な副作用アリ、用法用量には注意せよって書いておくわ」

闇司祭「乱用したあとに言うセリフじゃないわね」

女医　「最も乱用した人間がよく言うわ。うふふっ♪」